

機関番号：34319

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21720052

研究課題名（和文） 戦後日本映画における評論・批評の系譜

研究課題名（英文） Genealogy of postwar criticism of Japanese cinema

研究代表者

牛田 あや美（USHIDA AYAMI）

京都造形芸術大学・芸術学部マンガ学科・専任講師

研究者番号：00468729

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、戦後の日本映画における評論・批評を系譜だてることである。1951年から1970年までに誌面発表された約24000件をデータベース化したことにより、戦後の映画評論・批評をしていた人物の名前を抽出することができた。また戦後の映画評論・批評において問題としていたことが浮かび上がってきたのである。映画作品と批評を通し、日本が「戦争」へ向っていた時代、抗うことのできなかつた後悔の念が大きいことが明確となった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of the present study is to determine the genealogy of post-war criticism of Japanese cinema. There is a database containing about 24000 cinema criticism's written from 1951 to 1970. This gave out the names of almost the film critics. Also, in post-war criticism, regret over not having been able to oppose war is a notable feature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
年度			
総計	500,000	150,000	650,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術学 芸術史 芸術一般

キーワード：映画 映画評論 映画批評 大衆芸術

## 1. 研究開始当初の背景

（1）日本には映画評論・批評に焦点を定めた研究が存在していない。

- ① 先行文献資料として、映画評論家・小川徹、波多野哲朗、飯島哲夫、山根貞男の編纂した『現代日本映画論大系』（全6巻、冬樹社、1970年～1972年）がある。『現

代日本映画論大系』は優れた評論・批評のみの掲載であり、日本の評論・批評を広く範囲に記したものではない。

（2）映画評論家・批評家とは誰のことを指しているのか具体的でない。

- ① テレビで活躍していた淀川長治、水野晴郎（和夫）などは、映画評論・批評家と

して著名である。

- ② 一方で、映画専門誌や文芸誌などで評論・批評を展開していた人々は、名前すら忘れ去られている。
- ③ 映画評論家・批評家は、そのみに従事している人が少ない。編集者、小説家、文芸評論家などいくつもの顔を持った人がいるため、映画評論・批評をしていたことすら忘れられている人々がいる。

(3) 日本における映画評論・批評は非常に多く、多岐にわたっている。

- ① 例えば『キネマ旬報』のように戦前から現在に至るまで長期にわたる映画評論雑誌を発行している国は少ない。
- ② 日本では映画評論・批評雑誌が大正時代から存在しており、映画を観たらば、それを社会に発信したい人々が多くいたという土壌がある。
- ③ 映画雑誌が長年にわたり発刊されているがゆえに整理がされていないという現状がある。
- ④ 映画評論・批評の数量が膨大であるゆえ、映画評論・批評史というもの自体が存在しない。

## 2. 研究の目的

(1) 映画評論・批評家の名前を探り出す。

- ① 代表的な日本の映画評論・批評家を探り出す。
- ② 映画評論家・批評家を探り出すことによって、彼らが映画評論家・批評家として何を語っていたのかがわかる。

(2) 戦後の主な日本映画作品に対するの評論・批評をつなぎあわせる。

- ① とくに長文の評論・批評（映画作品宣伝だけでない評論・批評）においては、映画評論家・批評家が何を伝えたいのかが明確となる。
- ② 当時の映画評論・批評が抱える問題が明確となる。

## 3. 研究の方法

(1) 1950年代前半から1970年代前半(1951年～1970年)の映画評論・批評に限定した。

- ① 戦後の映画評論・批評に焦点をあてている。
- ② 1951年は、黒澤明の『羅生門』がヴェネ

チア国際映画祭でグランプリを受賞した年であり、日本映画が海外に進出するきっかけを作った作品である。

- ③ 1971年は日活ロマンポルノが誕生し、戦後の日本映画爛熟期の終わりを告げた。
- ④ そこで本研究はこの20年間と年代を限定した。

(2) 先行文献資料として、映画評論家・小川徹、波多野哲朗、飯島哲夫、山根貞男の編纂した『現代日本映画論大系』(全6巻、冬樹社、1970年～1972年)を使用した。

- ① 日本の映画評論・批評に焦点を集めた最初の文献である。
- ② 著名な映画評論家・批評家のみならず、文章が選抜され掲載されているが、文章の中身が濃く、戦後の映画評論・批評の指針となる。

(3) 『キネマ旬報』『記録映画』『映画評論』『映画芸術』『思想の科学』『新日本文学』から映画評論家・批評家の名前を抽出した。

- ① 映画評論・批評は多数の雑誌・新聞において掲載されている。そのなかにおいて、これらの雑誌を選んだ理由は、先行文献である『現代日本映画論大系』において優れた評論・批評から掲載された際、これらの雑誌の頻度が大きかった。
- ② 『記録映画』『映画評論』『映画芸術』『思想の科学』『新日本文学』は、映画興行の広告収入にあまり左右されない映画評論・批評をしているため選択した。
- ③ 『キネマ旬報』は映画雑誌として、長い歴史を持っているため選択した。

## 4. 研究成果

(1) 『キネマ旬報』では約16000件、『映画芸術』では約2500件、『映画評論』では約4100件、『記録映画』では約700件、『新日本文学』では約100件、『思想の科学』では約20件と約24000件をデータベース化した。

- ① 映画評論家・批評家は多岐に渡り、様々な人々を挙げるができる。例えば『キネマ旬報』ではおおかえの評論家・批評家のような方々も存在している。
- ② 『キネマ旬報』において1951年から1970年に渡り、10本以上の文章を掲載している評論家・批評家を挙げてみたい。評論家・批評家によっては、200本、300本と掲載している方々もいる。

秋山雪雄、葦原英了、阿部慎一、荒木寛

衛、荒正人、安藤鶴夫、飯沢匡、飯島正、飯島哲夫、飯田心美、井沢淳、磯山浩、市川崑、市川沖、伊藤大輔、稲垣浩、今井正、今野雄二、岩崎昶、植草甚一、上野一郎、牛原虚彦、内村直也、瓜生忠夫、江藤文夫、榎本滋民、大内秀邦、大川博、大蔵貢、大黒東洋士、大橋重勇、岡田真吉、岡田晋、岡田誠三、岡俊雄、岡本喜八、岡本博、荻昌弘、小倉真美、尾崎宏次、長部日出雄、押川義行、小田切一雄、梶原和男、加藤松三郎、金坂健二、川喜多かしこ、川喜多長政、河原畑寧、菊島隆三、岸松雄、北川冬彦、城戸四郎、木下恵介、清岡卓行、銀座山人、草柳大蔵、倉橋健、蔵原惟繕、滋野辰彦、品田雄吉、島海一郎、島崎清彦、嶋地孝麿、清水晶、清水俊二、清水千代太、清水正晴、白井佳夫、白坂依志夫、十返肇、新藤兼人、進藤光太、菅原卓、杉浦幸雄、杉山静夫、杉山平一、杉山誠、関口英男、外村完二、多賀三郎、高沢瑛一、高橋英一、滝沢一、竹内清和、武田泰淳、多田道太郎、田中純一郎、田中穰、田山力哉、近田千造、津田幸夫、津村秀夫、鶴見俊輔、戸井田道三、登川直樹、戸田隆雄、豊田四郎、鳥海一郎、中川鋭之助、永田雅一、長野広、中山信一郎、並木五郎、南部喬一郎、南部圭之助、根岸巖、野口久光、野間宏、橋本忍、筈見恒夫、波多啓、波多野完治、秦早穂子、八住利雄、八尋不二、花田清輝、羽仁進、林勝俊、林玉樹、林冬子、平井輝章、深沢哲也、福田定良、藤本真澄、双葉十三郎、マキノ光雄、増村保造、松田政男、水野和夫、水戸俊雄、南俊子、南博、村尾薫、村上忠久、村山祥邦、森岩雄、森満二郎、森本哲郎、安岡章太郎、山田和夫、山田桂三、山田宏一、山本嘉次郎、山本恭子、山本喜久男、吉田智恵男、吉村公三郎、淀川長治、陸知足、渡辺昭夫、渡辺淳、渡辺祥子（以上10本以上掲載している映画評論家・批評家）

- ③ ②に挙げた映画評論家・批評家は非常に多岐に渡っていることがわかる。特に『キネマ旬報』は他にデータベース化した『映画芸術』『映画評論』『記録映画』『新日本文学』『思想の科学』と比べ、明らかに映画興行の宣伝に使用されていたことから、映画監督、映画プロデューサーの名前が頻繁にあがっている。また男優、女優ともに『キネマ旬報』へ寄稿している点も注目に値する。
- ④ 映画監督、映画プロデューサーの場合、自作のことはもちろんだが映画というメディアについての問題を踏まえ、文章を書いていることが多い。
- ⑤ ②に挙げた映画評論家・批評家以外にも

10本以上掲載している方々はいる。それは演劇、ミュージカル、落語、テレビを専門に掲載していた評論家・批評家である。1951年から1970年までの『キネマ旬報』は映画だけでなく、他の娯楽についても掲載や連載をしていたことがわかる。

- ⑥ ②に挙げた映画評論家・批評家の名前をみて、明らかに映画評論家・批評家でない人物がいる。しかしながら、②に挙げたそれらの人物は、映画について語っているため映画評論家・批評家として名前を挙げた。つまり1951年から1970年にかけては、映画だけ、演劇だけを論じるのではなく、幅広い他分野の評論家・批評家が映画を論じていることがわかる。

(2) データ化した『キネマ旬報』『記録映画』『映画評論』『映画芸術』『思想の科学』『新日本文学』の発刊状況。

- ① 『キネマ旬報』と『映画評論』のみが、本研究の1951年から1970年までの期間、発刊している。『キネマ旬報』は1919年7月に創刊し、1940年11月終刊。翌年の1941年1月に『映画旬報』へと統合され、1943年に『映画旬報』は廃刊された。戦後の1946年3月に『キネマ旬報』は再刊され、1950年4月に休刊されたが、6ヶ月後の同年10月に復刊され、現在まで続いている。
- ② 『記録映画』は1958年8月創刊、1964年1月に休刊している。
- ③ 『映画芸術』は1951年1月から1953年10月まで、雑誌名は旧字の『映画藝術』となっている。1954年7月から新字の『映画芸術』としている。休刊していた時期もあるが現在まで続いている。
- ④ 『思想の科学』と『新日本文学』は映画批評雑誌ではないため、誌面ではそれほど映画のことは多く掲載されていない。しかしながら、長文掲載が多い。

(3) 先行文献とした『現代日本映画論大系』（全6巻、冬樹社、1970年～1972年）から見えてきたもの。

- ① 『現代日本映画論大系』が指針を示した分類、「戦後映画の出発—日本占領下から解放—」「個人と力の回復—戦前からの映画監督たちの復活—」「日本スーパーバグ—1950年代後半から1960年代にかけての状況—」「土着と近代の相剋—日本の家族制度の崩壊—」「幻想と政治の間—50年安保と60年安保の学生運動—」からも明確なように「戦争」の落とした影響を踏まえ論じられた日本映画作品が中心と

- なっている。
- ② 戦前の映画評論家・批評家は当然のことながら言論の自由はなかった。その同じ評論家・批評家が戦後においても映画評論・批評をした。本研究では1951年から1970年までであるため、彼らの多くは戦争を体験している。特にこの時期、映画評論家・批評家の重鎮と呼ばれた人々は戦前から映画評論・批評をしていた人々であった。彼らに忸怩たる思いがあって当然である。それが1951年から1970年までの映画批評には明確である。
  - ③ 例えば(1)②でも挙げた詩人でもあり、キネマ旬報の社員であった北川冬彦は『キネマ旬報 268号』のなかで「批評も戦争にかなり巻き込まれて」という一文を残している。これは映画評論・批評自体が「戦争」によって振りまわされたという一面が伺える。それは戦前の映画評論家・批評家も、戦前の日本映画作品同様に「戦争」へ加担していたことへの反省が、先行文献とデータ化とのつながりで検証された。

(4) 映画興行寄りの『キネマ旬報』と『記録映画』『映画評論』『映画芸術』『思想の科学』『新日本文学』との差異。

- ① 「記録」という点に関し、『キネマ旬報』が最も多くの情報が掲載されており、後の人々に対する文献として役立つ。
- ② 『記録映画』『映画評論』『映画芸術』『思想の科学』『新日本文学』と比べると、『キネマ旬報』は批評という面において、「読み物」としての文章では面白さに欠ける。
- ③ 『キネマ旬報』は基本的に宣伝としての役割が大きく、映画紹介というかたちが多い。そのため映画評論・批評として考えてみると他の5雑誌と異なっていることが多い。その一つに評論・批評の長さという問題がある。長文の映画批評もあるが、文字数が少ないことが要因にある。
- ④ 『キネマ旬報』は映画の宣伝を重要ポイントとしているため、あらずじやキャストを書いてしまうと、もうそれで文字数の制限がきってしまうことも多い。
- ⑤ 『キネマ旬報』は他の5雑誌と比べると、映画雑誌自体が「情報」のみを欲している点がある。例えば、どこの国で、誰が監督、誰が出演者なのか。物語はどのようなものだろうか。その程度の「情報」を映画雑誌自体が欲している。現在の「映画レビュー」なるものが多い。

(5) 印象批評と「読み物」としての映画評論・批評

- ① 印象批評というのは、著者が映画を見て感じた印象を基軸として書かれている。著者の主観によって映画評論・批評は左右される。後に「映画批評とは何か？」という問題が50年代後半から60年代に映画雑誌誌上で活発化されたとき、それ以前の映画評論家、批評家は印象批評ではないかと非難の対象として論じられている。
- ② 『記録映画』『映画評論』『映画芸術』『思想の科学』『新日本文学』は、映画評論・批評というよりも「読み物」としての性格が強く、思想やイデオロギーに立脚する映画評論・批評、政治的意味あいの強いものがある。
- ③ 『記録映画』『映画評論』『映画芸術』『思想の科学』『新日本文学』は、映画評論・批評とはいいつつも、映画作品とはかなりかけ離れている文章が多い。映画評論家・批評家にとってすでに言いたいことがあり、それを言うが為の映画評論・批評となっていることがある。
- ④ 50、60年代は日本が高度成長に向っており同時に、60年安保・70年安保を抱えた、政治的混乱のなかにいた。この時代、映画評論家・批評家だけでなく「物書き」という肩書を少しでもかじっている者であれば、自分達の取り巻く不条理な状況を見捨てることなど難しかったと考えられる。そのため、読者を煽動させるような文章が多いことも特徴のひとつに挙げられる。

(6) 「娯楽」としての映画評論・批評

- ① 大衆消費社会となってきた大正時代の後半から、昭和のはじめにかけ、映画評論・批評は、ある種のジャンルとして確立してきた。大正8年に『キネマ旬報』が創刊されたのも、この時代と重なっていることが要因であると考えられる。
- ② 映画評論・批評というよりも、「読み物」として面白いものが多い。『キネマ旬報』以外の他の5誌は、後の人々が読み返すと、面白いことは面白いのだが、映画作品についてはほとんど書かれていないこともある。文章によっては、その映画作品を観た人でも観たことない人でも、その作品についてわからないという文章もある。しかしながら「読み物」としては圧倒的に面白い。
- ③ 『キネマ旬報』でも、「読み物」としての文章もあるが、現時点で読んで、さっぱり書かれている映画作品についての意味がわからないということは少ない。その点で『キネマ旬報』は映画作品の「記録」と「情報」という点においては、他

誌より優れている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

① 牛田あや美、過去から遠く離れて - 『儀式』をめぐる映画批評の必要性 - 、コミュニケーション教育学研究誌、査読有、1 巻、2011、pp. 未定

② 牛田あや美、戦後の日本映画における映画批評の一考察 - 1951 年～1970 年までの『キネマ旬報』を中心に - 、クロストーク、2011、pp. 未定

[学会発表] (計 1 件)

① 牛田あや美、戦後の日本映画における評論・批評の系譜 - 1951 年～1970 年までの『キネマ旬報』を中心に - 、日本映像学会、2010 年 5 月 30 日、日本大学芸術学部 (東京)

[図書] (計 1 件)

① 江藤茂博、山口直孝、浜田知明、牛田あや美、他、横溝正史研究 2 - 特集・ビジュアルライズ横溝正史ミステリー第 2 号、戎光祥出版、2010、pp. 69-86

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

牛田 あや美 (USHIDA AYAMI)  
京都造形芸術大学・芸術学部マンガ学科・専任講師  
研究者番号：21720052

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

広瀬 愛 (HIROSE AI)  
尚絅学院大学・総合人間科学部表現文化学科・准教授  
研究者番号：30515432

